

来迎院如来蔵所蔵の

『相好文字抄』について

南部忠明・河野敏宏

目次

- 一、はじめに（本稿の目的）
- 二、相好とは何か
- 三、相好語への加注にみられる『相好文字抄』の編纂目的
- 四、『相好文字抄』における相好語の出自
- 五、結語

一、はじめに（本稿の目的）

来迎院如来蔵所蔵の『相好文字抄』は、阿弥陀仏をはじめとする諸仏の特徴である「三十二相八十随好」について、諸経から相好語を引用して注を加えた仏典音義だと考えられている⁽¹⁾。奥書には大治四年（一一二九年）書写の識語があり、重要文化財に指定されている。撰者は未詳である。

『来迎院如来蔵聖教文書類目録』（文化庁文化財保護部美術工芸

来迎院如来蔵所蔵の『相好文字抄』について

課刊）によってその書誌を紹介すれば以下のようなものである。

〔縦〕 二六・一、第二紙長、五四・四、十四紙、卷子製、表紙

薄茶地楮紙

料紙楮斐交漉紙、墨界（界高二四・二、界中二・〇五）

〔外題〕 相好文字抄、如来蔵書（本カと添字あり）

〔本文〕 一行あたり十九〜二十一字、一枚二十七行、本文同筆

ニテ墨傍訓、送仮名、声点、校合、紙背加筆アリ

〔奥書〕 大治四年九月九日未時計書畢、執筆最實

〔別筆〕 「二交了仁融」（又別筆）、「同十二月十一日移點了」

〔時代〕 平安後期（大治四年）

〔本文中〕 大般若経音訓（小島真興撰）、類聚抄（和名類聚

抄）、唐韻、玉篇等の引用極メテ多シ

なお、我々の調査によって包紙には『相好文字抄下』と記されていることが確認された。「下」があれば『相好文字抄上』も存在すると考えるのが普通だが、『相好文字抄上』なる典籍は今のところその存在が知られていない。「下」という文字は後世に付加された可能性もある⁽²⁾。従って、本稿では『相好文字抄下』と記せずに『相好文字抄』と記す。

本書は注文中に、国語学・中国語学上重要な典籍の佚文（『切韻』・『唐韻』・『大般若経音訓』・元興寺信行撰述の典籍等）を多数含むために佚文收拾の好資料として扱われることが多いが、本書それ自体がどのような典籍であるのかについては、ほとんど論じられたことはなかった。

本書についてある程度詳しく述べたものとしては、管見に入つた限りでは、築島裕が「この本（『相好文字抄』、筆者注）は、仏の八十相好を現す文字について、諸書を引用して説明を加えたもので、多分院政期のものと思われる」、「如来の相好ということは他の經典にも見えることだが、取分け大般若経にはその記事が著しく『大般若経三十二種好八十相好』という独立した書物もあるほどなので……（以下略）」と述べているのみである。⁽⁴⁾

本稿の目的は『相好文字抄』における相好語のあり方を手がかりとして『相好文字抄』が如何なる書であるかを述べ、さらにそれらの相好語がどのような典籍からどのように引用されたのかを具体的に指摘することである。

なお、今回の研究にあたり、来迎院御住職、齋藤孝圓氏のご厚意によって、筆写および調査を行うことができた。記して深く感謝申し上げます。

二、相好とは何か

まず最初に問題となるのは『相好文字抄』に冠せられた「相好」という語である。「相好」なる語については『相好文字抄』の冒頭部分に以下のように記されている。（注……「」は、傍注・ふりがな・送りがなを示す。句点は筆者。以下同じ。）

大般若音訓云相好上「ハ」去聲謂相見也。即三十二相也。下「ハ」上聲陸□法「人」云美也善也。即八十随好也。

この記述によれば、「相好」とは仏の三十二相と八十随好であ

ることが分かる。それでは相好・三十二相・八十随好とは何か。具体的に説明すれば以下のようなものである。

相好とは、仏や如来の身体に具わる三十二相と八十随好の吉相の総称である。

三十二相とは、三十二大人相などともいい、仏や如来の身体に具わる三十二の顕著な吉相のことである。例えば「眉間白毫相（眉間には白い柔らかい毛がありその毛は右旋している）」「眼睫如牛王相（瞳は紺碧であり睫毛が牛王のような姿をしている）」「咽中津液得上味相（最大の味感を有しており、唾液ですべての味をうまくすることができると）」などの仏の顕著な身体的特徴をさす。⁽⁵⁾

一方、八十随好とは八十随好形、八十種好、八十種妙好などともいい、仏や如来の身体に具わる八十の微妙な吉相のことである。例えば、「面門から常に最上特殊の香りをだす」「身体は長大であり端直である」「歯が方正で鮮白である」などの仏の微妙な身体的特徴をさす。岡田行弘によれば八十随好は三十二相を補充するものであつて、八十随好全体の価値は三十二相の一つの大人相の価値より低いという。⁽⁶⁾

三十二相と八十随好の、仏典における記載のあり方については、次の（一）～（三）のような特徴があるとされる。

（一）三十二相と八十随好は、ある特定の仏典のみに記載されているのではなく多様な仏典に記載されている。

例えば、三十二相は、

『華嚴經』第二十五、『大智度論』第四、『大般若經』第三
八十一・第五百七十三、『大乘百福莊嚴相經』、『方廣大莊嚴
經』、『觀佛三昧海經』第一至第四、『瑜伽師地論』第四十
九、など、

また、八十随好は、

『舊華嚴經』第二十五、『大毘婆沙論』第七十七、『大般若
經』第五百七十三、『无上依經』卷下、『瑜伽師地論』第四十
九、『大智度論』第二十六・第二十九・第八十九、『俱舍論』
第十八、など、

両者ともに多様な仏典に記載されている。⁽⁷⁾

(二) 三十二相と八十随好の、諸仏典における記載量には多寡の
差がある。

岡田行弘によれば、八十随好は、漢訳仏典中において全部で十
八のテキスト(二十一箇所)に記載されているが、三十二相の記
載は、これよりはるかに多く、その量は八十随好の五倍程度であ
るといふ。⁽⁸⁾

(三) 三十二相と八十随好の、諸仏典における順序やそのあり方
は同一ではない。

この点について、岡田行弘は次のように述べる。

三十二大人相の場合にも「何をもって三十二の相とするか」
という選択は各経論において若干の相違が存在していたので
あるが、八十随好においては随好を選択するという問題は、
その数の拡大にともなって一層複雑化している。八十という

来迎院如来蔵所蔵の『相好文字抄』について

数を満たすために各経論は三十二大人相との類似・重複とか
配列の不自然さ、同内容の特徴の反復というようないくつか
の問題点も残している。⁽⁹⁾

これは、例えば、『大智度論』第八十八では、

二十九者眼色如金精。三十者眼睫如牛王。三十一者眉間白毫
相柔白如兜羅綿。三十二者頂髻肉成。

と記載されているのに対して、『瑜伽師地論』第四十九では

二十九者其目紺青。三十者睫如牛王。三十一者其頂上現鳥瑟
膩沙。三十二者眉間毫相其色光白螺文右旋。

と記載されているが如き例をいう。⁽¹⁰⁾つまり、三十二相の順序や
記述のあり方は諸仏典において同一ではないのである。

また、『相好文字抄』に先行する『往生要集』巻中には「是諸
相好。行相利益廢立等事。諸文不同。」⁽¹¹⁾とあり、この記述からも
相好の順序などについて諸仏典は同じではなかったことが分か
る。

以上の内容を要約すると次のようである。

①相好とは、仏や如来が具えている三十二相と八十随好の吉相
のことであり、仏や如来の顕著な特徴を三十二相といい、補
完的な特徴を八十随好という。八十随好全体の価値は、一つ
の三十二相より低い。

②相好は様々な經典に記載されているが、各々の相好の順序、
名称、および記述のありかたは諸經典によって違う。

三、相好語への加注にみられる『相好文字抄』の編纂目的

次に『相好文字抄』においてこれらの相好語にどのような注が加えられているのかについて述べる。まずはじめに冒頭部分を例として示す。〔一〕は出典注。〔一〕は傍注・ふりがな・送りがな。《》は割り注。ーは、おどり字。声点は省略した。太線は筆者。(○行目)は本文における位置。(

・【大般若音訓云】相好上〔ハ〕去聲謂相兒也。即三十二相也。下〔ハ〕上聲陸□法〔人〕云美也善也。即八十随好也。

^A・【大般若經云】有白毫相。【音訓云】毫胡力反。【玉篇云】長毛也。或作「レリ」豪。【王逸】「人」云「銳」【エイ トキ】毛也。今案二形通用之。(四行目)

^B・【大般若經云】如觀羅綿。【音訓云】堵羅綿上都古反。或作都或作兜。下弥連反。亦作繇。【釈氏云】絮「シヨ タ」也〔一 音序〕《似綿而麤惡也》【行瑠】「タウ」云「ー」者細綿也。今案堵羅「ハ」梵語。綿「ハ」唐言也。

・【法華攝釋云】都羅綿者都羅樹名此「ココニ」无相「ヒ」當「アタルモノ」故不譯也。綿從樹出名「ー」。如言柳絮「依柳出得柳絮名。(六行目) …… (中略) ……」
^C・【无上依經云】右旋上靡。【大般若音訓云】靡文彼反。【行

瑠云】偃「エン」順之状也。又元也。非此用矣。(十六行目) …… (中略) ……

・【大般若云】光潔晃曜。【音訓云】晃曜上胡廣反。【孫愰云】明也暉也。下以照反。【陸法云】照也。(二十六行目)

・【同經云】金臺。【法華慈恩音訓云】臺徒來反。尔疋「ニハ」四方「ニシテ」而高曰「」。《類聚臺和名字天奈》。(二十八行目)

・【同經云】勁及雙肩。【玉篇云】頸吉郢切。【說文云】頭莖也。又云雙所江切。兩也。偶「クウ」也。又飛鳥二枚也。

【音訓云】肩古賢反。【孫愰云】頂上也。轉也。(三十行目)

例えば、傍線部A「大般若經云有白毫相」、傍線部B「大般若經云如觀羅綿」、傍線部C「无上依經云右旋上靡」のような記述から分かるように、本書においては『大般若經』や『无上依經』等から「有白毫相」や「如觀羅綿」「右旋上靡」などの相好語を引用している。同名の經典が続く場合は「同經云」として固有名を省略している(詳しくは〈表一〉を参照)。本書に引用された相好語は全部で一三七語である。そしてこれらの相好語には各種典籍から引用された注が加えられている。

ここで重要なことは、これらの注のほとんどは、中国の小学書(『玉篇』『切韻』等)や仏典音義(『大般若經音訓』『行瑠音義』『文應音義』等)や、義疏(『法華經玄贊撰釋』『法華經玄贊』)か

ら引用された小学的な注であるということである。例えば、傍線部Aの「有白毫相」の条文では、まず「毫胡力反」という音注、「長毛也」「鋭毛也」という義注、さらに「或作豪」という字体注や「今案二形通用之」という字体に関する案語などが収録されている。換言すれば、仏教教義的な注はほとんどみられないということである。

このような点からみれば、『相好文字抄』は、仏典音義というよりも、様々な仏典から相好語を取り上げて主として小学的な注を加えることを目的とした一種の「仏典辞書」、特に「相好語辞書」のようなものとして編纂されたと考えられる⁽¹²⁾。

四、『相好文字抄』における相好語の出典

ところで、『相好文字抄』の一三七語の相好語は具体的にどのような仏典から引用されているのだろうか。その全体像を〈表一〉として示す。

〈表一〉の「引用經典名」の項目には「大般若経云」「无上依経云」のように当該相好語の出典となった經典名を記した。「相好語」の項目には、「有白毫相」「右旋上靡」のように、これらの經典から引用された相好語を記した。*印のあるものは表末の注を参照。「序数」は『相好文字抄』に出てくる順序による序数である。また、「同経云」のように固有名を挙げていない出典注については、例えば「同経（大般若）云」のように具体的な經典名を補った。なお、この序数のひとつひとつが三十二相八十種好の相

好の一つ一つに対応しているとは限らない。例えば、2番「有白毫相」、3番「如觀羅綿」、4番「逾珂雪等」の三つを併せて一相である。（後述の〈表二〉参照。）

〈表一〉

序数	引用經典名	相好語
1	大般若音訓云	相好
2	大般若経云	有白毫相
3	大般若経云	如觀羅綿
4	大般若経云	逾珂雪等
5	无上依経云	右旋上靡
6	六波羅蜜経云	婉轉右旋
7	六波羅蜜経云	頗胝迦宝
8	大般若云	光潔晃曜
9	同経（大般若）云	金臺
10	同経（大般若）云	頸及雙肩
11	瑜伽論云	及項
12	十住論云	兩掖
13	百福莊嚴相経云	缺減
14	尼乾子経云	高峻
15	大般若云	膊腋
16	大般若云	充實

17	觀佛經云	摩尼珠
18	觀佛經云	跏腋
19	同經(觀佛經)云	脇肋
20	伽論(瑜伽論)云	項脊
21	大般若云	容儀
22	同經(大般若)云	洪滿
23	伽論(瑜伽論)云	僂曲
24	十住論云	七肘
25	大般若云	仙王
26	同經(大般若)云	離翳
27	同經(大般若)云	縱廣
28	同經(大般若)云	如諾瞿陀
29	同經(大般若)云	頷臆
30	十住論云	廣厚得所
31	般若經(大般若)云	威嚴
32	觀佛經云	缺瓮骨
33	般若經(大般若)云	一尋
34	最勝經(最勝王經)云	赫奕
35	同經(最勝王經)云	項背
36	觀佛經云	金色艷
37	同經(觀佛經)云	鈎鎖骨槃龍結
38	又(觀佛經)云	副稱

39	大般若云	淨蜜
40	最勝經(最勝王經)云	拘物頭華
41	十住論云	君垣華
42	同論(十住論)云	蜜繳
43	瑜伽論云	上下齒鬣
44	同論(瑜伽論)云	齷腭
45	觀佛經云	下斷
46	大般若云	四牙
47	同經(大般若)云	鮮白鋒利
48	同經(大般若)云	喉脉
49	同經(大般若)云	延縮
50	同經(大般若)云	擁曲*
51	同經(大般若)云	吞咽
52	又(大般若)云	津液
53	又(大般若)云	身心適
54	无上依經云	咽喉
55	觀佛經云	流注
56	同經(觀佛經)云	適舌根上
57	同經(觀佛經)云	咽嚥
58	大般若云	能覆
59	同經(大般若)云	梵音
60	同經(大般若)云	詞韻和雅*

82	同経(大般若)云	頻蹙
81	同経(大般若)云	熙怡
80	同経(大般若)云	含笑先言*
79	同経(大般若)云	舒泰
78	大般若云	天帝弓
77	觀佛經云	雙皆
76	无上依經云	眼瞼
75	又(百福經)云	含翠
74	又(百福經)云	婉麗
73	百福經云	紺艷
72	觀佛經云	俱洵
71	同経(大般若)云	皎潔
70	同経(大般若)云	紅環
69	同経(大般若)云	紺青
68	大般若云	眼睛
67	十住論云	希疏
66	无上依經云	紺炎
65	又(大般若)云	眼睫
64	又(大般若)云	和悦與言
63	又(大般若)云	如頻迦音
62	又(大般若)云	婉約
61	又(大般若)云	洪震

104	无上依經云	涌起
103	同経(大般若)云	天蓋
102	大般若經云	烏瑟膩沙
101	大般若云	額廣
100	觀佛經云	擾生*
99	大般若云	綺靡
98	瑜伽云	角鬢
97	大般若云	輪埵
96	報恩經云	頰車
95	同経(觀佛經)云	鷹王鳴
94	觀佛經云	當于
93	最勝王經云	如載金鋌
92	大般若云	且直
91	同経(觀佛經)云	蝌斗
90	觀佛經云	髭鬢
89	同経(觀佛經)云	如頻婆菓
88	同経(觀佛經)云	丹暉
87	同経(觀佛經)云	兩吻
86	觀佛經云	師子欠相
85	同経(大般若)云	面門
84	同経(大般若)云	好巡奮處
83	同経(大般若)云	常少

126	同経（大般若）云	庠序
125	同経（大般若）云	庠審
124	同経（大般若）云	怯弱
123	同経（大般若）云	敦肅
122	同経（大般若）云	諸竅
121	大般若云	敦重
120	同経（觀佛經）云	如脂
119	觀佛經云	間錯
118	无上依経云	那羅延
117	乾子経（尼乾子経）云	鉤鎖
116	大般若云	支節
115	无上依経云	脈理
114	同経（大般若）云	盤結
113	大般若云	筋脈
112	乾子経（尼乾子経）云	緞蓋
111	大般若云	末達那
110	无上依経云	无骸
109	同経（觀佛經）云	頂腦
108	同経（觀佛經）云	金剛
107	觀佛經云	合拳*
106	智論云	如捲*
105	同経（无上依経）云	成髻

127	无上依経云	斜戾
128	同経（无上依経）云	迴如
129	瑜伽云	轉側
130	同論（瑜伽論）云	礫石
131	同論（瑜伽論）云	磚瓦
132	大般若云	四指量
133	尼乾子経云	炳着*
134	大般若云	随轉
135	大般若云	透進
136	无上依経云	剛彊
137	大般若云	轉範*

〔注記〕

- ・ 50 大般若経中では「癡曲」とある。
- ・ 60 大般若経中では「詞韻弘雅」とある。
- ・ 80 大般若経中では「念笑先言」とある。
- ・ 100 觀佛経中では「卷生」とある。
- ・ 106 大智度論中では「如拳」とある。
- ・ 107 觀佛経中では「合捲」とある。
- ・ 133 尼乾子経中では「炳著」とある。
- ・ 137 大般若経中では「軌範」とある。⁽¹³⁾

〔表一〕によれば『相好文字抄』においては、その収録している相好語全百三十七例のうち六十六例を『大般若経』⁽¹⁴⁾から引用し

ていることが分かる。六十六例は全体の約四十八%にあたり最も多い。次に多く引用されるのが『観佛經』の二十七例で、全体の約二十%である。両者を合わせると全体のほぼ七割を占める。それ以外の經典は『无上依經云』が十二例、『瑜伽論』が九例、『十住論』が六例、『尼乾子經』、『最勝王經』、『百福莊嚴相經』が各四例ずつ、『六波羅蜜經』が二例、『大般若經音訓』、『報恩經』、『大智度論』が各一例ずつである。

以上のことから『大般若經』と『観佛經』が『相好文字抄』中の相好語の主要な出典であることが分かる。

前述したように相好語を記載した仏典は多様である。それでは、なぜ『相好文字抄』では『大般若經』と『観佛經』から相好語が多く引用されているのであろうか。

その理由は以下のようであると考えられる。

周知のとおり『大般若經』は大乗仏教の根本經典であり、なかでも玄奘訳の『大般若經』は、数ある般若經典類のなかで最も完成した經典であるとされている。このため玄奘以降の漢訳者は玄奘訳の『大般若經』中の記述を忠実に継承している¹⁵⁾。したがって、玄奘訳の『大般若經』以後に撰述された仏書が相好を記述する場合には、当然のことながら玄奘訳の『大般若經』を重視すると考えられる。また、『観佛經』は仏道修行における「観佛」¹⁶⁾にとって重要な經典である。相好において両書を重視することは、『往生要集』にも、「然今三十二略相、多依大般若、廣相随好、及諸利益、依観佛經」、すなわち「今三十二の略相は多く大般若經

により、広相と随好及び諸々の利益とは観佛經に依る¹⁷⁾」とあることから明らかである。まさにこの記述のとおり、本書はその相好語の多くを『大般若經』と『観佛經』から引用しているのである。

ところで、『相好文字抄』は『大般若經』のどの箇所から相好語を引用しているのであろうか。『大般若經』は大部な經典であるが、実は、相好の記載は複数の箇所集中している¹⁸⁾ので、引用箇所を特定することは比較的簡単である。三十二相と八十随好がまとまって記載されている箇所は、①卷第三百八十一(初会、諸功德相品)、②卷第四百六十九から卷第四百七十にかけて(第二会、衆徳相品)、③卷第五百三十一(第三会、妙相品)、④卷第五百七十三(第六会、二行品)、の計四箇所である。

ただし同じ順番の相好語(例 第二十五相)であっても、これらの記載箇所によって、その相好語や相好の説明内容が異なる場合がある。例えば、第二十五相を例にとってこの四箇所における相違を示せば以下のようなのである。

①〔卷第三百八十一〕「世尊常得味中上味。喉脉直故能引身中諸支節脉所有上味。風熱痰病不能為雜。由彼不雜脉離沈浮延縮壞損癱曲等過。能正吞咽津液通流故。身心適悅常得上味。是二十五。」

②〔卷第四百六十九品から卷第四百七十〕「如来常得味中上味。是二十五。」

③〔卷第五百三十一〕「諸佛常得味中上味。喉脉直故能引身

中千支節脈所有上味。是二十五。」

④〔卷第五百七十三〕「如来常得味中上味喉脈直故。能引身中千肢節脈所有上味。是二十五。」⁽¹⁹⁾

したがって、『相好文字抄』における『大般若経』からの引用部分とこれら四箇所の記載内容とを比較対照すれば、『相好文字抄』がこれらの四箇所のうちのどこから当該の相好語を引用したかを特定できることになる。

両書を比較対照した結果、それは卷第三百八十一であることが判明した。両者がよく一致する実態を〈表二〉として示す。

〈表二〉は、『相好文字抄』において【大般若経】として引用された相好語（表の上段の語）と『大般若経』卷第三百八十一中の三十二相および八十随好の当該の相好語（表の下段の語）とを対照して示したものである。三十二相には※印をつけさらに太枠で囲んだ（それ以外は八十随好）。なお、三十二相の『大般若経』において示されている順番は【】で囲んだ。当該相好語には、太線を付した。最上段の数字は〈表一〉の「序数」である。

〈表二〉

2	有白毫相 ※	世尊眉間有白毫相。右旋柔軟如觀羅綿。
3	如觀羅綿 ※	鮮白光淨逾珂雪等。【是三十一。】
4	逾珂雪等 ※	

8	光潔晃曜 ※	世尊身皮皆眞金色。光潔晃曜如妙金臺。
9	金臺 ※	衆寶莊嚴衆所樂見。【是第十四。】
10	頸及雙肩 ※	世尊兩足二手掌中頸及雙肩七處充滿。【是第十五。】

15	膊腋 ※	世尊膊腋悉皆充實。【是第十七。】
16	充實 ※	

21	容儀 ※	世尊容儀圓滿端直。【是第十八。】
22	洪滿	なし

25	仙王	世尊身相猶如仙王。周匝端嚴光淨離翳。是第二十。
26	離翳	
27	縱廣 ※	世尊體相縱廣量等。周匝圓滿如諾瞿陀。【是第二十。】
28	如諾瞿陀 ※	
29	頷臆 ※	世尊頷臆并身上半。威容廣大如師子王。【是二十一。】

31	威嚴	世尊身分上半圓滿。如師子王威嚴無對。是四十六。
----	----	-------------------------

33	一尋 ※	世尊常光面各一尋。【是二十二。】
----	------	------------------

64	63	62	61	60	59	58	53	52	51	50	49	48	47	46	39	
和悦與言	如頻迦音 ※	婉約 ※	洪震 ※	詞韻和雅 ※	梵音 ※	能覆 ※	身心適 ※	津液 ※	呑咽 ※	擁曲 ※	延縮 ※	喉脉 ※	鮮白鋒利 ※	四牙 ※	淨蜜 ※	
是七十一。 世尊音聲不高不下。隨衆生意和悦與言。	迦音。【是二十七。】			聞。其聲洪震猶如天鼓。發言婉約如頻	世尊梵音詞韻弘雅。隨衆多少無不等	【是二十六。】	世尊舌相薄淨廣長。能覆面輪至耳髮際。	能正呑咽津液通流故。身心適悦常得上味。【是二十五。】			由彼不雜脈離沈浮延縮壞損癱曲等過。	諸支節脈所有上味。風熱痰病不能為雜。	世尊常得味中上味。喉脉直故能引身中	世尊四牙鮮白鋒利。【是二十四。】	【是二十三。】	世尊齒相四十齋平淨蜜根深白逾珂雪。

97	92	85	84	83	82	81	80	79	78	71	70	69	68	65
輪埵	且直	面門	好巡奮處	常少	頻蹙	熙怡	含笑先言	舒泰	天帝弓 ※	皎潔 ※	紅環 ※	紺青 ※	眼睛 ※	眼睫 ※
世尊耳厚廣大脩長輪埵成就。是四十二。	世尊鼻高脩而且直其孔不現。是三十三。	是二十九。 世尊面門不長不短。不大不小如量端嚴。	世尊顏容常少不老好巡奮處。是七十九。	是五十九。 世尊面貌光澤熙怡。遠離顰蹙青赤等過。	是五十八。 世尊顏貌舒泰光顯。含笑先言唯向不背。	【是第三十。】	世尊面輪其猶滿月。眉相皎淨如天帝弓。	世尊眼睛紺青鮮白。紅環間飾皎潔分明。【是二十九。】	【是二十八。】	世尊眼睫猶若牛王。紺青齋整不相雜亂。				

125	124	123	122	121	116	114	113	111	103	102	101	99	
庠審	怯弱	敦肅	諸竅	敦重	支節	盤結	筋脈	末達那	天蓋	烏瑟膩沙	額廣	綺靡	
<p>世尊行步直進庠審如龍象王。是為第七。</p> <p>世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。</p> <p>世尊諸竅清淨圓好。是五十四。</p> <p>世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。</p>					<p>世尊支節漸次臚圓妙善安布。是第十二。</p>		<p>世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。</p>		<p>世尊首相周圍妙好。如末達那亦猶天蓋。是六十三。</p>		<p>世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。</p> <p>世尊頂上烏瑟膩沙高頭周圍。猶如天蓋。【是二十一。】</p>		<p>世尊雙肩綺靡順次紺瑠璃色。是第四十。</p>

126	庠序	世尊行步安平庠序不過不減猶和牛王。是為第九。
-----	----	------------------------

132	四指量	世尊行時其足去地。如四指量而現印文。是六十八。
-----	-----	-------------------------

134	隨轉	世尊迴顧必皆右旋如龍象王舉隨轉。是第十一。
135	透迤	世尊自持不待他衛。身無傾動亦不透迤。是六十九。

137	轉範	世尊所為先觀後作。軌範具足令識善淨。是七十六。
-----	----	-------------------------

この表は以下のことを示している。

例えば、8番「光潔晃曜」と9番「金臺」は、『大般若経』では「是第十四」となっている。つまり、両相好語は『大般若経』では三十二相のうちの「第十四番目の相」として掲載されているものから引用されたことがわかる。以下、同様に10番「頸及雙肩」は「第十五相」から、15番「髀腋」と16番「充實」は「第十七相」から、というように引用され、102番「烏瑟膩沙」103番「天蓋」の「第三十二相」から引用されたものまでが「相好文字抄」に収録されている。

これらの相好語は22番「洪滿」の一例を除いて、『大般若経』卷第三百八十一の相好語と極めてよく一致している。前述の第二十五相を例にとれば、48番「喉脉」から53番「身心適」の六例の相好語は、卷第三百八十一には記載されているが他の三箇所には記載されていないものであり、『相好文字抄』がこれらの語を卷第三百八十一から引用したことを明確に示している。

また『相好文字抄』に収録されている三十二相の相好語のうち、「第三十一相」が冒頭におかれていることと、第十六相と第十九相が引用されていないことを除けば、第十四相から第三十二相までは『大般若経』卷第三百八十一の記載順序に従って規則正しく引用されていることが分かる。

以上の理由により、『相好文字抄』中の『大般若経』とは『大般若経』卷第三百八十一をさしていると考えられる。なお、第一相と第十三相、第十六相、第十九相が引用されていない理由については、残念ながら現時点では不明である。

ところで、三十二相の引用状況とは異なり、八十随好は『大般若経』卷第三百八十一記載の順序通りには引用されていない。例えば、79番「舒泰」は「世尊顔貌舒泰光顯。念笑先言唯向不背。是五十八。」から引用され、85番「面門」は「世尊面門不長不短。不大不小如量端嚴。是二十九。」から引用されているが如くである。

八十随好にこのような引用順序の違いがあるのは、三十二相の語の内容にあわせて、それに関係のある八十随好を適宜抜粋して

来迎院如来蔵所蔵の『相好文字抄』について

掲載したからだと考えられる。例えば、〈表二〉において59番「梵音」から63番「如頻迦音」までの「第二十七相」は「阿弥陀仏の声」という身体的特徴であるため、この直後に、八十随好の中の同様の身体的特徴である64番「和悦與言」を、「第七十一随好（世尊音聲不高不下。随衆生意和悦與言。）」から抜粋して追補したものと考えられる。前述したように、同じ相好語ではあつても、八十随好は三十二相の補完的な特徴として扱われているので、このような掲載のあり方はこの特徴とよく整合している。ただし、八十随好も、三十二相の場合と同様に、『大般若経』卷第三百八十一から全ての随好が引用されているわけではない。

本章の内容を要約すると

- ①『相好文字抄』はその相好語の多くを『大般若経』と『観佛経』から引用している。
 - ②『大般若経』から引用された相好語は、同書の卷第三百八十一から集中的に引用されている。
 - ③ただし三十二相八十随好の全ては引用されていない。具体的には、三十二相の「第一相」から「第十三相」までと、「第十六相」および「第十九相」は引用されていない。
 - ④三十二相は『大般若経』卷第三百八十一の三十二相の順序にほぼ従っているのに対して、八十随好はその順序に従わず、三十二相を補完する形でその説明にあわせて適宜引用されている。
- ということである。

五、結語

本稿の結論をまとめれば以下のようである。

来迎院如来蔵『相好文字抄』は、諸仏典から相好語（阿弥陀仏をはじめとする諸仏の特徴である相好すなわち三十二相と八十随好）を取り上げ、小学的な注を加えた一種の仏典辞書、特に「相好語辞書」のようなものであると考えられる。とりわけ、『大般若波羅蜜多經』全六百巻中の巻第三百八十一から相好語を集中的に引用しており、それらは本書における相好語引用のほぼ半数を占める。ただし、三十二相と八十随好の全ては引用されておらず取捨選択が行われている。

注

- (1) 吉田金彦「辞書の歴史」(講座『国語史3 語彙史』所収、大修館書店、一九七一年)。および、築島裕「古代日本語発掘」(学生社、一九七〇年)。
- (2) 包紙にのみ『相好文字抄「下」』とあることについては、御住職の齋藤氏から「江戸時代に如来蔵の整理、移動があった時に付けられた仮題ではないか」とのご指摘をうけた。
- (3) 上田正「切韻逸文の研究」解説篇(汲古書院、一九八四年)、三保忠夫「元興寺信行撰述の音義」(『国語と国文学』第五十一巻、第六號、一九七四年)、築島裕「真興撰述大般若經音訓について」(『長澤先生古稀記念 圖書學論集』所収、三省堂、一九七三年)、築島裕

「大般若經音義諸本小考」(東京大学教養学部人文科学科紀要第二十一輯、一九六〇年)など。

- (4) 築島裕(注(1)前掲書)を参照。なお、同氏より「当時、観智院には『大般若經三十二相八十随好』なる典籍が存在しており、この典籍には喜多院点が付され、明らかに法相宗と関係がある。『大般若經』の相好は、単に天台宗だけでなく法相宗も関心が深いテーマではなかったか」との指摘を一九九六年五月の訓点語学会にて頂いた。これらの点については以下のように考える。すなわち、法相宗の学僧は『大般若經』中の三十二相と八十随好を単に知っていたということであり、直ちに法相宗の教義には結びつかないのではないかということである。なぜならば『摩可止觀』に代表されるように実践をも重んじる天台宗においては、相好業のような「行」は重要な意味を持つのに対して、唯識の道理を明かす法相宗にとっては、たとえ仏の相好に関心があつたにしても、法相宗の教義と、念仏や觀仏という実践的な「行」とは直ちに結びつかないからである。なお、興福寺からは「法相宗には、天台宗の相好業に相当するような「行」はない」とのご教示をいただいた。また、『相好文字抄』は、『元興寺信行の典籍』、真興撰『大般若經音訓』、『法華經玄贊撰釋』等、法相宗関係の典籍から多く引用しているが、このことを以て『相好文字抄』が天台宗ではなく法相宗に関連のある典籍であるとはいえない。なぜならば、天台宗の僧侶が法相宗の典籍を、法相宗の僧侶が天台宗の典籍を引用しても不思議ではないからである。例えば、『法華經釋文』は興福寺の僧、中算撰であり、法相宗の書物であることは明らかであるが、その注文中においては、「天台云」として天台宗関係の典籍を教義とは関係なく引用している。(西原一幸・河野敏宏・顧国玉『妙法蓮華經釋文』引用の典籍(一)——所引典籍の全体構造——)一九九一年、「金城学院大学論集」国文学篇三十三号)。つまり、天台関係の典籍が引用さ

れることを以て『法華經釋文』が天台関係の書物であるといわれな
 のと同じように、『相好文字抄』が法相宗関係の典籍から多く引用し
 ていることを以て、法相宗に関連のある典籍であるとは一概にはい
 えないのである。

(5) 望月信亨『望月仏教大辞典』（世界聖典刊行協会、一九五四〜一九
 六三年）等による。

(6) 岡田行弘「八十随好」（『我』の思想（前田専学博士還暦記念論
 集）所収、春秋社、一九九一年）による。

(7) 望月信亨 前掲書による。

(8) 岡田行弘 前掲論文による。

(9) 岡田行弘 前掲論文による。

(10) 望月信亨 前掲書による。

(11) 『大日本仏教全書』第三十一（復刻版）所収の「往生要集」六〇頁
 （名著普及会、一九七八年）による。

(12) また、『相好文字抄』は、特定のテキストに密着した注釈書とはい
 えない点からも、「音義書」ではないと考えられる。

(13) 以上の表記は「SAT大正新脩大藏經テキストデータベース2012」
 の検索結果による。

(14) 「大般若経（『大般若波羅蜜多經』）」のテキストは『大正新修大藏
 經』第五卷〜第六卷を用いた。

(15) 岡田行弘 前掲論文による。

(16) 『観佛経』は『観佛三昧海経』の略称。『観佛経（観佛三昧海経）』
 についての『仏書解説大辞典』の解説は以下のとおりである。「全十
 卷。観佛三昧経ともいう。佛陀跋陀羅が東晋時代の隆安二年（三六
 九）から永初二年（四二二）において譯出。」その内容は「佛を觀じ
 佛を念ずるには如何にすべきかを詳叙し、且つその殊勝なる功德を敷
 衍するもの」とあり、また、「經中には三十二相、八十随好が列ねら

来迎院如来蔵所蔵の『相好文字抄』について

れ順觀法をして逆觀法の両様の觀法等が擧げてある」とある。なお
 『観佛三昧海経』のテキストとして『大正新修大藏經』第一五卷を用
 いた。

(17) 『大日本仏教全書』第三十一「往生要集」六〇頁。

(18) 『大般若経（大般若波羅蜜多經）』の卷第三百八十一は『大正藏』六
 卷九六八頁以下、卷第四百六十九から卷第四百七十に至る箇所は『大
 正藏』の七卷三七七頁以下、卷第五百三十一は『大正藏』の七卷七二
 六頁以下、卷第五百七十三は『大正藏』の七卷九六〇頁以下、の箇所
 を各々参照した。

(19) これらの記述から、卷によって、「世尊」「如来」「諸佛」など、仏
 の名称が異なっていることや、その注釈に違いがあることが知られ
 る。つまり、『大般若経』というひとつの經典内においても相好の記
 述は同一ではなくバリエーションがあるということである。

(20) 22番「洪滿」は、卷第三百八十一では「円滿」と記載されているの
 に対し、他の三箇所では「洪滿」と記載されている。

(付記) 本稿は一九九六年五月の訓点語学会（於青山学院大学）で発表し
 た草稿に加筆訂正を加えたものである。なお、本稿をなすにあたって
 は、西原一幸氏から貴重な助言を頂いた。記して深く感謝申し上げます。